

質的比較分析（QCA）は経験的データをいかに扱うべきか

——全国 47 都道府県の出生率データの真理表分析から理論生成を行う試み——

岡山大学 齋藤圭介

1 目的

質的比較分析（QCA: Qualitative Comparative Analysis）という方法論は、当初は、変数指向の計量的研究と事例・歴史指向の質的研究を架橋する方法論として提唱されていたが、現在では〈職人芸〉ではない標準化された分析手続きを備えた事例指向の方法論だと理解されている。

本報告の目的は、この QCA という方法論が理論と経験的データをいかに密接に関連したものと捉えているのかを、具体的な分析手続きではなく認識論的水準での他の方法論的立場との異同から明らかにするものである。

2 方法

すでに量的研究や質的研究の方法論において蓄積が十分にある 47 都道府県の出生率データを用いて、QCA の方法論を適用する。とくに QCA が固有に有する方法論的特徴——集合論と真理表を用いることと、結合因果の考え方を採用すること（Rihoux and Ragin 2009）——を軸に、そこで析出してきた知見を既存の量的・質的研究の知見と比較検討する。

まず QCA と呼ばれる方法論が、47 都道府県の出生率データを分析をするさいに直面する複数の課題を取り上げ、量的研究やその他の質的研究が抱える一般的な課題との比較を通して、QCA という方法論に固有の課題を明らかにする。つぎに、QCA の方法論が経験的データから理論を導出するさいのデータの扱い方に着目をし、具体的な方法論的手続きの水準ではなく、経験的データから理論を導出するさいの理論的な因果や仮定をいかに QCA が想定しているのかを、認識論的水準で議論する。

3 結果

分析の結果、QCA の方法論が共通して抱える、①常在する因果関係を仮定しない、②因果効果の一律性を仮定しない、③単位の均一性を仮定しない、④加算性を仮定しない、そして⑤因果の対称性を仮定しない、の 5 つは、他の方法論と一部共有しつつも QCA ではより強く意識されていた。

また別の側面として、今回対象とした出生率にかぎらず社会現象一般を QCA を用いて分析するさい、複数のありうる変数からどれを選ぶのかという問題、変数の閾値の設定方法、そして知見の〈決定論的〉側面には厳しい批判も投げかけられている（Lucas and Szatrowski 2014）。こうした批判への経験的データを用いた分析からの再批判は、理論と実証という側面からは可能であった。

4 結論

以上から、47 都道府県の経験的データを質的比較分析（csQCA, mvQCA, fsQCA）に適用することで得られる知見と、量的研究や質的研究で得られる知見との照らし合わせから、方法論ごとのデータの扱い方と、そこで想定されている認識論の相違の特徴を明らかにすることが可能となる。

文献

- Lucas Samuel R., and Alisa Szatrowski, 2014, “Qualitative Comparatave Analysis in Critical Perspective,” *Sociological Methodology*, 44(1)1-79.
- Rihoux, Benoît and Charles C. Ragin (2009) *Configurational Comparative Methods: Qualitative Comparative Analysis (QCA) and Related Techniques*. (=2016, 石田淳・齋藤圭介監訳『質的比較分析（QCA）と関連手法入門』晃陽書房）。